



平成26年2月28日  
内閣府（防災担当）

## 首都直下地震モデル検討会(第27回)合同会議 議事概要について

### 1. 検討会の概要

日時:平成25年10月18日(金)

場所:中央合同庁舎第3号館 防災A会議室

出席者:首都直下地震モデル検討会委員

阿部座長、入倉委員、岡村委員、佐竹委員、武村委員、古村委員、翠川委員、山崎委員

### 2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法などについて事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 統計的グリーン関数法での震度の分布に縞がみえることについて、震源から少し遠くなるとメッシュサイズで周期性が出てしまうため、メッシュサイズの影響が出ないように破壊速度を少し揺らがせたりする必要が出てくる。しかし破壊速度を余り揺らがせるとディレクティビティ効果がなくなってしまうから余り揺らがせないという難しい問題がある。
- 揺れやすさマップの断層上端の深さについて、今後の研究が進むことを考えると、地震基盤が浅いと揺れが大きくなる可能性があること知ってもらうためにも地震基盤という概念は残しておいたほうがいいのか。
- 鳥取県西部地震は地震後調査しても累積性のある活断層というのは見つかっていない。岩手・宮城内陸地震は、地震後、調査すると地表に少し変位が出て、その周辺で過去には大きな変位を起こした活断層が見つかっている。同じものが例えば関東平野にあると、見つかる確率のほうが高いのではないか。
- 未知の断層で地表面に痕跡がない地震のMwは、地表地震断層が明瞭かどうかではなく、地形的に断層が蓄積しているかどうかということのほうが重要ではないか。
- 海外の古地震学者の主張は、地震が起こったらどういふ変状が出るか、地滑りや地殻変動などすべての変状が出るかで調査し、そうするとM6以上で出ないことはないというもの。日本では累積性のある断層を評価するといえは彼らとの考え方の違いが明確になる。
- 元禄の割れ残り地震は、過去に起きていないのだけれども、起きているのではないかという考え方は成り立つのですが、実際に起きたものはないということで慎重な議論が要るのではないか。
- 多分、海溝型地震で本当に段丘が残るといふのは極めて特殊。房総半島はその特殊なところ

ろだが先端部だけで、南海トラフでも静岡県とか震源域の上にあるが、明瞭な段丘というのはなく残らないのは普通である。証拠はないが、検討対象の他に知らない地震があるのではないか。

- 大正関東地震については、大正のときに起こったことと、今こったことはどう違うのかということを見るためにも被害想定を行うことが非常に重要で、要はその間にいろんなことをやってきたし、大正のころから比べてはるかに人間が集中しているという様子もある。歴史的なものとの比較ができるものは大正関東地震しかない。
- 大正関東地震の東京中心の震度再現が難しいことについて、震度(階)の区切りを変えたら見えるようになるのであれば、そういう絵もどこかに載せてはどうか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官(防災担当)付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 中込 淳

同参事官補佐 平 祐太郎

TEL : 03-3501-5693 (直通) FAX : 03-3501-5199